

## ポストコロニアル批評とD.H.ロレンス —『羽毛の蛇』をめぐる—

倉持 三郎

(平成8年9月30日受理)

### Post-colonial Criticism and D.H.Lawrence: With Special Reference to *The Plumed Serpent*

Saburo KURAMOCHI

(Received September 30, 1996)

#### 1

ロレンス (D.H.Lawrence) の *The Plumed Serpent* (1926) は問題作である。彼自身は、「ぼくの、これまで書いたうちで一番重要な小説です」<sup>(1)</sup> 「ぼくのほかのどの作品よりも、私の心情に近いものです」<sup>(2)</sup> と述べている。このあと、『チャタレー卿夫人の恋人』が書かれるからそれを除いてはということであるが、かなり、思い切った感想であり、ロレンス自身作品に満足していることがわかる。

しかし、かならずしも評価は定まっていない。

Vivas は、小説としては失敗であるとする。

この作品のもっとも明かな欠点は、ロレンスがこの作品を書く目的であったイデオロギーはこの物語から遊離している。つまり、作品は、劇的にでなく、観念として考えられている。<sup>(3)</sup>

その主題については、アステカの宗教復活運動と、その中で男女関係の成就であると指摘する。「その意図する主題は、ふたつの部分、つまり、政治的、宗教的主題と、性的主題である」<sup>(4)</sup>

Clark は、その主題について次のように言う。

彼女(ケイト)がいるメキシコは、ヨーロッパとアメリカその国では神は死んでいるのだ—から絶望して逃亡したあとで、彼女の探求する精神が成就に達する

のを期待できる最後の場所であるからだ。メキシコにおいては、白人が押しつけた文明の堆積の下で、神々は依然として生きているのだ。ケイトの精神とメキシコという国のあらゆる面—人間的と宗教的面をふくめて—での引き合いと反発からこの作品は発展する。<sup>(5)</sup>

Cavitch はこう言う。

小説の主な行為は、墮落した人間の行為を人間性が神性をおびる次元まで高める努力である。新しい宗教は、主要人物を神にすることであり、あらゆる信者にたいする意図された効果は、その本質的な神性の確信を呼び起こすことである。(中略) ラモンのつくる宗教は、女性が男性に「空の下の大地のように絶対的に服従」することを要求する性の儀式と、結婚の聖餐式である。<sup>(6)</sup>

前述の主題はそれなりに正しいのであるが、本論ではそれをふくみながら、ひとつの違った角度から、この作品を見てみたい。その角度というのは、最近とくに注目されてきたポストコロニアル批評である。*The Post-colonial Studies Reader* に収録されている種々の論文からも分かるように、多くの論者がいるが、ここでは、そのひとりサイド (Edward W. Said, 1935 - ) の説をとくに考えてみたい。

#### 2

*Orientalism* の著者、サイド は、ポストコロニアル批評の視点に立つ、有力な批評家である。彼は、この

著書の冒頭でこう言う。

1975-76 の凄惨な内戦のときペイルートを訪問した、あるフランスの新聞記者は、破壊された中心街について、残念そうにこう書いたのである。「それはかつては、シャトーブリアンや、ネルヴァルのオリエントであったのに」彼は、その場所について真実を語っている。とくに、ヨーロッパ人から言えばそうなのである。オリエントはヨーロッパ人が発明したものである。そして、昔から、ロマンス、異国情緒豊かな文物、忘れがたい記憶と風景、すばらしい経験の場所であった。<sup>(7)</sup>

サイドがヨーロッパというとき、英仏、そして現代ではアメリカを指すのであるが、ヨーロッパの勢力は、中近東を侵略して、自分たちのイメージにしたがって町造りをしたのである。原住民の感覚とは違うのである。勝手に「オリエント」という概念を作り上げたのである。オリエントというのは、中近東について、ヨーロッパが作りあげた概念であって、かならずしも、現実の中近東とは一致しないのである。

サイドは、エルサレム生まれのパレスチナ人である。(ただし、イスラム教徒ではなく、少数派の英国国教徒である)イスラエル建国によって祖先の土地を追われたという意識がある。そしてイスラエルの背後にある英仏、そして、アメリカに対する反発がある。いわゆる、第三世界に属する人間として、英仏、アメリカなどの西欧の勢力を批判的に見る。極端な例としては、湾岸戦争(1990-1)においてイラク側を完全に批判するわけではなくて、西欧によって支配されているアラブの独立の現れとみるのである。

これを言うだけでサイドの基本的な姿勢はよく理解できるのであるが、しかし、サイドはそれほど偏狭ではない。彼はエジプトで教育をうけたあと、15歳で、アメリカ合衆国に移住して、現在、コロンビア大学の比較文学の講座で教鞭をとっており、欧米の考え方を理解している。文学作品の理解にあたっても、すべてをイデオロギーからは見ない。

基本的に第三世界に属する人間として、欧米人とは違った立場から欧米の文学をみている点で貴重な存在である。日本人の場合、開国以来、欧米諸国が優秀な文化を持っているのを知り、それを学び、それを真似することに全力をあげてきた。その結果、欧米を真似て、植民地獲得

戦争まで遂行したことは記憶に新しい。今日でも、欧米諸国の代わりに、アメリカ合衆国を入れ換えれば、姿勢は同じである。したがって、基本的な姿勢として、英米の文学を英米人が理解するように理解しようとしてきたといつてよい。

サイドを読むと、それとは違うので驚く。欧米を見る見方は、学ぶべき国や文化としてではなくて、自分たちを支配し続けた帝国主義の国と見る。だから批判的である。かつて植民地であった国と、敗戦までは独立を保った国では歴史が違うので、ひとまとめに論じることはできないが、常に欧米人と同じになろうとする日本人の立場を反省させる点でサイドの存在は貴重である。サイドは、政治的には、現在、帝国主義はほとんど消滅したが、文化的には、帝国主義は終わっていないとする。帝国主義の国はある種類の責任感で動いていた。

物質的な利害を越えてひとつの責任感があった。それは常に繰り返し言われている責任感であって、一方では、立派な人間が、遠い領地や、原住民を支配すべきであるという観念を受け入れることであった。他方では、これらの立派な人間が、下等の、劣等な、あるいは後進の国民を支配する、永続的で、ほとんど形而上的な絶対権を考えることができるほど中央の活力を満たすという責任感であった。<sup>(8)</sup>

帝国主義国が他国にたいしてとった態度の例として、サイドは1798年のナポレオンのエジプト遠征をあげている。ナポレオンは遠征にあたって、記録するため学者、フリーエをとまった。彼はのちに、エジプトに関する大部の記録を残すことになるのであるが、その一節をサイドは引用している。

この国は、ただ、偉大な記憶を提示する。芸術の故郷であり、無数の記念碑を保存する。その主要な寺院と、国王の住居である宮殿は、依然として存在する。そのうちの一番新しい建造物でも、トロイ戦争のときまでには建てられたものである。ホーマー、リクルガス、ソロン、ピタゴラス、プラトンはすべて、科学、宗教、法律を学ぶためにエジプトに行った。<sup>(9)</sup>

この記述を読むと、エジプトはヨーロッパ文化の一部であるかのような印象をあたえる。とくに関係のあった

過去のエジプトについて記載して、現在のエジプトには、ほとんど、注意を払わない。遠征によって、エジプトの住民がいかに苦しんだかは分からない。フリエと並べて、サイドは、当時のエジプトのイスラム教の指導者、ジャバルティの記録を引用している。

今年は、大戦闘の時代のはじまりであった。重大な結果が恐ろしい仕方であつた。悲惨は果てしなく重くなった。日常の行事は乱された。ふだんの生活は崩壊し、破壊が襲い、いたるところが荒廃した。<sup>(10)</sup>

こういう住民の悲惨は事実ではあっても、フランス側には何ひとつ理解されないのである。だから、帝国主義の侵略の実情を記録するためには、原住民による記録が必要となる。

サイドは、帝国主義支配を分析する場合にイギリスの近代小説を重要な資料とみる。近代小説は、帝国主義の発展とともに始まった。イギリスの近代小説の最初とされる『ロビンソン・クルーソー』に、はやくも帝国主義のはしりをみる。それは、原住民にたいするクルーソーの扱いである。クルーソーは、人食い人種によって食われそうになったひとりの原住民を救って召使にした。これはいかにも象徴的である。原住民は食人種であるということは、ヨーロッパ人から見れば、いかに野蛮であるかということである。それによって、征服してよいという根拠が生じるとする。救った原住民を召使にしたということにも象徴的な意味がある。原住民は召使になる宿命を帯びるのである。またフライディと名付けられた原住民は、現在、忠実な下男の代名詞になっているが、これはイギリス人が原住民に期待する人間像なのである。

コンラッドは、サイドが高く評価する作家であるが、その作品に現れるヨーロッパ中心主義を批判する。

コンラッドは次のように言っているようだ。「われわれ西欧人は、だれがよい原住民で、だれがわるい原住民であるかを決定する。なぜならば、原住民は、われわれの認知によって十分な存在をもつからである。われわれが彼らを創造した。われわれが、彼らに話し、考えることを教えた。彼らが反乱をおこすとき、彼らは、ヨーロッパの主人のあるものにだまされた、馬鹿な子供という、われわれの見方を証明するだけである。これは、実質的に、今アメリカが南の隣人について考

えていることなのである。つまり、自分たちが容認する種類の独立であるかぎり、独立が彼らに望ましいのである。それ以外にいかなることも容認できないし、さらに悪いことには、考えられないのである」<sup>(11)</sup>

帝国主義の侵入という観点から見れば、とくにコンラッドの『闇の奥』が重要である。ベルギーの植民地であるアフリカ、コンゴ地方にクルツは、象牙を得るために住み、権力を振るう。支配する白人側から見れば、原住民は未開で野蛮で恐ろしい存在であるが、原住民から見れば、白人が収奪するために侵入してきたのであり、責められるのは白人であり、勝手にやって来ておいて「地獄だ、地獄だ」と叫ぶのも変である。ただ、サイドは、コンラッドの帝国主義批判の面も評価している。

前述の、『ポストコロニアル批評研究』に論文が収録されているナイジェリア生まれの小説家で批評家のアチェベ(Chunua Achebe)は、『闇の奥』で原住民が人間として描かれていないとして、「コンラッドは徹頭徹尾、人種差別主義者である」<sup>(12)</sup>と断定する。

アチェベは、かつての植民者にたいしてこう言う考えをもつ。

植民地主義者の精神にとって、つねに次のように言えることがもっとも重要であった。(a) 原住民は本当に単純である。(b) 原住民の理解と管理は平行して行うこと。なぜならば、原住民理解は、管理の前提条件であり、管理は、理解の十分な証明になるからである。<sup>(13)</sup>

基本的にはサイドと同じで、原住民はヨーロッパ人よりも劣っている。だから、管理し支配するのが当然であり、そうすることによって、原住民は平和に、健康に幸福に暮らせるということである。原住民はヨーロッパ人よりも劣等であるということは、文章の表面には明確に現れなくても、間接的に、婉曲な形で表現されているとサイドは指摘する。実はこの点が重要である。植民地(コロニアル)時代には、明言されたものが、政治的独立後(ポストコロニアル)の時代に消滅したわけではなく、婉曲になっているだけだというのである。そのように表現されている文学や音楽、絵画に接することによって、ヨーロッパ人が優越しているという観念が浸透していき、ヨーロッパの支配が正当化されるのである。

こういうヨーロッパ人の見方を念頭において『羽毛の蛇』を読むとき何が見えてくるであろうか。また、この視点からは、『羽毛の蛇』の初稿である『ケトサルコアトル』(Quetzalcoatl, 1995)も参考になるので、適宜言及したい。

## 3

『羽毛の蛇』は、メキシコを舞台とした小説である。メキシコは、サイドや、アチェベが言及した中近東でもアフリカでもないが、かつてスペインが征服した国である。20世紀に入ると、アメリカが勢力を伸ばして行く。この点では、かつてのアフリカと同じである。独立国となったものの、まだ安定はしていない。

メキシコにロレンスも旅をした。メキシコを訪れて小説を書いたイギリス人はそれほど多くない。主要な作家として、G.グリーン、M. ロウリーがいる。

ロレンスは、その体験をもとにして、『羽毛の蛇』(*The Plumed Serpent*, 1926)を書いた。女主人公、ケイト・レズリー(Kate Leslie)にメキシコ体験をさせている。

ケイトはイギリス人があるが、アイルランド出身であることに注目する必要がある。アイルランドは、サイドの表現では、白人植民地であった。原住民は白人ではあるが、中央政府によって支配されていたのである。(エドモンド・スペンサーとアイルランドの関係にふれる研究家がいらないことをサイドは嘆いている)1922年、アイルランドは自治州となり、イギリスからの独立の一步をあるきはじめた。ケイトの夫は独立の闘士であった。アイルランド独立は、当時は、大きな問題であり、当然ロレンスの頭にはあったろう。

このようなケイトであるから、メキシコ体験もアイルランド人として体験することになる。アイルランドの独立にとって神話、伝説の復活、文芸復興が重要であったように、メキシコの文化復興の重要な意味をケイトが考え、そして、昔の宗教のことに思い至るのも自然である。だから、こちこちの植民地行政官とは違ったメキシコ体験をするのは当然である。次に、作品での、ケイトのメキシコ体験を見よう。

## (1) 無礼なメキシコ人

ケイトが、メキシコにおいて一番最初にショックをうけるのは、第1章の闘牛場においてである。

切符を買って入るとき、いきなり身体検査を受ける。これは武器を持っているかどうかを、体に触って調べるのである。まず、同行のオウエン(Owen)が調べられた。これは、ケイトにとってショックであった。野蛮な国だという印象である。実際は、共産党革命の直後であり、当然かもしれないが、ケイトにはショックであった。

観覧席に座って、オウエンが帽子を脱ぐと、そのはげた頭に向かって、観覧席からオレンジが投げ付けられ、それが彼の肩にあたった。「帽子を脱がない方がいいぞ」ともう一人の同行者のヴィリヤーズ(Villiers)がいう。すると、ヴィリヤーズのパナマ帽に向かってバナナの皮が投げ付けられた。ケイトは、「なんとひどい人なんでしょう」と叫ぶ。エチケットもなにもないのである。イギリス人が読んだら、やはりケイトと同じように叫ぶだろうし、日本人が読んでも同じであろう。メキシコは礼儀をわきまえぬ、野蛮な国である。

自分の席に座っているオウエンのひざの間にひとりのメキシコ人が割り込んだきた。そして居座るのである。「押し出せ」とヴィリヤーズが言うが、オウエンはためらっている。やっと押し出すが、その背中に向ってケイトは、「無礼だわ」と叫ぶ。

闘牛そのものも不快きわまりないものであった。牛が、老馬の腹を突き、内臓がでる。観衆はそれを見て喜ぶ。「面白がり喜ぶ叫びが観衆のあいだに起こった」(18)<sup>(4)</sup> ケイトには、闘牛で牛を殺すことは動物いじめ以外のなものでもない。闘牛はもとをただせば、スペインから輸入されたものであり、帝国主義が残した悪のひとつといえる。しかし、流血は、闘牛だけではなくて、アステカ時代の生け贄の儀式を思わせるものである。ケイトは、後に、アステカのナイフや、石のこん棒を見ていやな気持ちになる。

## 2) 白人のメキシコ観

第2章で描かれているお茶の会は注目すべきものである。アステカを研究している考古学者、ノリス(Norris)夫人が、ケイトや、判事夫妻、武官などを招待する。メキシコ人、ラモンとシプリアーノも招待されて現れるが、二人が登場するまで、白人たちが、メキシコ人の批判をするからである。

まず、モンテスの率いるメキシコの労働党が槍玉に上げられる。メキシコ人を貧困から救うために外国人の搾取に抗議してデモをするが、むやみに発砲する暴徒くら

いにしか見られない。悪意に満ちたこんなエピソードまで話題にあがる。党の幹部が、住民の訴えを聞き、知事に電話して、聞いてもらったと言うが、その電話が、玩具の電話だったという。いかに労働党がだめかという宣伝である。ケイトは言う。

メキシコ人たちは、あらゆるものを裏切ろうと願っているようです。犯罪者と恐ろしいことが大好きなようです。醜悪なことが、とことんまでくることを願っているようです。裏にある、あらゆる醜悪なもののかきまぜて表に出そうとしています。それを楽しんでいるようです。あらゆることを醜悪にすることを楽しんでいるようです。(P.38)

それにたいして、判事も同調する。

「その通りです。彼らは国全体を、ひとつの大きな犯罪にしようとしています。ほかのことは何も好きではありません。正直さとか、上品さとか、清潔さが好きではないのです。嘘と、犯罪を育てようとするのです。この国で自由と呼ぶものは、犯罪を犯す自由にすぎないのです。それが労働党が意味することです。それが、彼らすべてが意味することです。犯罪の自由です」(P.38)

これを読めば、ヨーロッパ人がいかにメキシコに不信感をもつかは明らかである。「正直さ」、「上品さ」、「清潔」は、イギリス人にとって、何物にも代えがたい徳性であろう。それがないということは、いかに野蛮かということになる。

### 3) 政治よりも宗教優先

第3章で、ケイトはガルシアという二十代のメキシコ人の大学教授と会い、議論する。ガルシアの主張は、社会主義の主張であり、資本家を倒すことにより、メキシコの貧困を救えるというのである。

資本家を憎まねばなりません。メキシコでは憎まねばなりません。そうしないと、だれも生きていきません。ぼくたちは生きていけないのです。だれも生きていきません。メキシコ人であるならば、人間になれないのです。それは不可能です。社会主義のメキシコ人にな

るか、資本家のメキシコ人にならねばなりません。ほかには何になれるのでしょうか。ぼくたちは、資本家を憎んでいる。なぜならば、彼らがこの国と国民を駄目にしてからです。おれたちは資本家を憎まねばならない」(P.54)

これにたいして、ケイトの主張は、社会主義の主張はヨーロッパのものであり、メキシコの人民と関係ないのである。「あの人たち(メキシコ人)は、資本も社会主義も知りません。本当のメキシコはあの人たちののです。あの人たちこそ、まさにメキシコです。彼らを戦争の種にする以外は、誰もあの人たちに見向きもしません。あなたがたにとって、人間としては、あの人たちは存在しないのです」(P.54)

ケイトは、メキシコに次のようなイメージを持っていた。「ケイトは、メキシコを純粋な、牧歌的な家父長制の国と想像していた。というのは、彼女は、政治抜きに生活の人間的な簡素さにもどりがかった、本当に。しかし、そのような幸運には恵まれなかった。自由主義者たちは、農民は土地を欲しているといい、農場主たちは、そうではないという」(Q. 67)

ケイトは、ガルシアの政治的とらえかたを否定して、この論争に勝ったと思う。しかし、それは、ケイトの思いこみかもしれない。ケイトのメキシコ観は楽園としてのメキシコであり、現実遊離であろう。いかに混乱があっても、人々の生活向上のためには政治が必要であろう。

ケイトは別の方面に関心を向けてしまう。その直後、新聞で、ケイトは、「古いメキシコの神々がメキシコに」もどるという記事を読むのである。湖は、昔から信仰の対象になっていた。つばのなかに自分の耳から取った血をいれて湖に沈めると、不死を得られるという信仰がある。ある日、「巨体で裸かの男が湖から岸に向かってあるいてきた。その男の顔は黒く、ひげをはやしており、彼の肉体は、金色に輝いた」(P.56)

これは、この作品における分岐点になる。ここから、ケイトは、メキシコの古い神の復活運動へと傾斜していき、メキシコの現実から離れる。

アステカの古い宗教の復活運動の指導者のラモンも、政治を否定する。中身の腐った卵のまわりを洗うようなものである。問題は腐った中身をどうするかである。

政治か。モンテスが持ち込んだ「社会的」宗教は、卵

の外側を洗い、それをきれいに见せるようなものだ。私はそうではなくて、卵のなかに、卵のど真ん中に入り、卵から新しい鳥が生まれるようにしてやりたい。(P.191)

第2章のお茶の会では、白人たちが、労働党の悪口を言った。外国人が悪口を言っている間は聞き流すことはできるが、今度、労働党の悪口を言うのは、先住民の血を持つメキシコ人、ラモンである。白人だけではなくて、原住民もまた、政治を信頼していないという風に話は進んでいく。

#### 4) 治安の悪さ

第6章では、メキシコの治安の悪さについて、書かれている。チャバラ湖の湖畔はかつてはメキシコのリヴィエラと呼ばれた。共産党革命以前は、アメリカ人たちの避寒地として栄えた。ドイツ系メキシコ人が、農園をもっていた。彼は原住民に人気がない。「財産を所有していれば、天国から来た天使だって人気がなかったろう」出資してホテルを作り、アメリカ人のベルが支配人になった。ホテルの所有者の息子のホセが強盗に狙われた。5人の原住民と、混血の原住民たちはホセを殺して、裸にして仰向けにして性器を切り取りそれを口にくわえさせた。

これは、治安の悪さと、原住民の残忍さを明確に表している。しかし、その裏側には、原住民たちの生活困窮を読みとるべきであろう。独立したものの、経済的には外国人、とくに、アメリカ人が支配しているのだ。

オウエンは仕入れた情報でケイトに説明する。「彼ら(農園の所有者たち)は、同じことを繰り返す。アメリカが国を併合してくれないかぎり、この国は、決して安全にならないだろう。また、よいことはないだろう。アメリカのものにならないかぎり、この国は文明国にならないだろう」(Q.66)<sup>(45)</sup>

治安の悪さについて、サイドは、こういうことを述べている。白人の支配から離れて独立したとしても、独裁者が現れたり、一部の金持が支配したり、共産主義になったりして、植民地時代よりも生活は悪化している。しかし、それは筋違いであり、長い植民地支配の方に問題がある。ただ、この作品の読者は、そのような国なら、アメリカが併合した方がよいだろうと感じる。こういう部分が、無意識のうちに、帝国主義を正当化する言

説となる。

#### 5) 原住民の美

第6章では、ケイトは、オレンジとサンドイッチを与えたとき、原住民の男性の美に気がつく。

煙るような灰色の目をした男は、一方の男よりもずるそうに見えたが、もっと誇らしげに見えた。男は、目でこういうのだ。「俺たちは生きている。おまえのセックスを知っている。おまえは俺のものを知っている。俺たちは、神秘に手を触れない。おまえも俺の生まれながらの名誉に干渉しないでくれ。ご親切ありがとう。(中略)彼女は彼らのなかに、静けさ、謙そん、感謝の気持ちを見た。なにが本当に美しく、本当に男性的なもの、文明化された白人のなかには発見するのが困難なものがあつた。それは精神に属するものではなかった。それは、暗黒の、強靱な、不屈の血であり、魂の開花であつた」(P.107)

政治に反発しながら、他方、原住民の美を称揚する方向に進む。ここで、注目しなければならないのは、「文明化された白人のなかには発見するのが困難なもの」というとらえ方である。これは、一見、原住民を評価しているように見えるが、あくまでも、ヨーロッパ中心の発想であり、原住民の一部のみを見たり、全体像をゆがめて見る危険性がある。このようなとらえ方からは、メキシコの貧困は表現されない。

#### 5) ダンスによる一体感

第7章では、ケイトが、原住民のダンスの輪に入ることが描かれている。

彼女は、はずかしがりながら、ぶぎっちょにダンスのステップを踏みはじめた。しかし、靴をはいているので、動きがにぶく、ぎこちなかった。リズムが取れなかった。彼女は、混乱しながら動いた。(中略)輪は変りはじめた。ケイトはゆっくりと、ふたりの静かであうとりしている男の間を回った。その腕が彼女の腕に触れた。そして、ひとりが彼女の指をやさしく、ゆるく、だが親しみをこめて掴んだ。あらあらしい歌が起こった。(中略)何と美しいゆっくりしたダンスの輪なのであろうか。ふたつの大きな流れが、触れ合い、反対方向に流れていく。(中略)外側の輪はすべて男

性であった。彼女は背中に彼らの暗い奇妙な輝きを感じるようであった。(P.126-7)

ケイトが、原住民のダンスに加わったことは重要である。これまで食い違った経験について書いてきたが、ここに至って経験が一致したからである。はじめはリズムが合わなかったが次第に手を取られて、リズムがあっていった。

#### 6) メキシコ人の貧困

第9章で、ケイトが宿泊している宿の女主人のジュアンナはケイトに言う。「白人がみんな持っていってしまうんです」(P.148) この叫びは悲痛である。しかし、その訴えを、ケイトはすべて受け入れることはできない。「進歩する力をもたない国民は、ひどく搾取されることがあろうか。数世紀にわたって、なすすべなく、残酷に搾取されてきたのである。そのため彼らの背骨は悪意ある抵抗で固まっていた」(P.149)

ケイトの考えでは、搾取されているのは原住民にやる気や自助の精神がないからだということになる。ケイトは知らず知らずのうちに自分のイギリスの思想で原住民を見ていることになる。

『ケトサルユアトル』では下宿の女主人のフェリペはことあるごとにケイトから金を取ろうとする。それも、ケイトが、フェリペの足を直すために医者を呼んでやったあとなのである。また、衣服も買ってやった。ふつうならその好意にたいして、感謝してしかるべきなのに、金をせびるという卑劣な行為に腹をたてるのである。もちろん、これはメキシコだけの話ではないが、こう書くことでメキシコ人がいかに卑劣であるかということをイギリスの読者は読みとる。それにたいして、ケイトの夫は祖国の自由と、幸福という理想のために戦い死んだ。この国にはそのような理想はない。すこしでも金をだまして取るしかない。その通りであろう。しかし、その理由は、目を覆うばかりの貧困である。それについて、ロレンスは直接には書いてはいないが、行間から読みとることができる。食うに困っているのである。だから、金があると思えばだまし取るのである。

なぜ貧困なのか。その貧困の原因はヨーロッパの搾取ではないのか。ヨーロッパ資本家が搾取しているのではないのか。サイドはそこを言うであろう。

ケイトの頭のシラミを取ってやると少女たちがくる。

不潔な環境である。野蛮だという印象である。母親、娘たちが、互いに、背中を見せあい、シラミとりをする。それも白昼堂々やっているので、ケイトは怒る。怒るのも当然であるが、それよりも、貧困のために不衛生になっていることもケイトは考えるべきであろう。

#### 7) 小鳥をいじめるメキシコの子供

14章で、湖の岸で子供たちが、紐で縛られて飛べない小鳥に石を投げつける場面がある。ケイトは怒る。「行ってしえ、醜い子供たち」(P.216)

これは、イギリス人の小鳥にたいする気持ち、動物愛護の精神による。もちろん、その精神が法律化されたのは、それほど前のことではない。イギリス人は動物を虐待しないというわけではない。ただ、ケイトは動物愛護の精神によって行動する。動物愛護の精神のあるイギリス人がこれを読めば、メキシコの子供たちは何と野蛮だろうと思うだろう。これから道徳的に劣等な種族だという考えも生じるかもしれない。

さらにケイトが放してやった小鳥を、18歳位の男の子がとってしまう。おそらく食料にするのであろう。

ケイトが小鳥に同情するのは当然であるが、牛を殺してその肉を食べることはないのだろうか。もし食べるとしたら、ケイトの主張はおかしい。ただヨーロッパの習慣をメキシコ人におしつけるだけであり、ヨーロッパ文明がすべてよいという前提に立つものである。

#### 8) 勇敢なイギリス女性、ケイト

第19章では、ラモンが暗殺者たちに襲われる場面が描かれている。暗殺者はラモンの宗教運動に反対するグループの廻し者である。ケイトの勇気と信義が描かれている。襲撃されて、暗殺者とラモンが取り組みあいになって、その暗殺者の手がピストルに届きそうになったときに、彼のピストルを取り上げてしまい、そのあと、襲ってくる暗殺者に向かって、ピストルを発射する。それによって、ケイトはラモンの生命を救うのである。

これは、ふうつの人間にできないし、また、とくに女性にはできない。だから、ケイトは並外れた勇敢さをもっているということになる。イギリスの読者は、おそらく、植民地ではよくこういうことがあるから、そこにいる女性には、それに応じるだけの勇気が要求されているということを思うだろう。特に、植民地行政官の妻は、襲ってくる暴徒と戦い、夫を助けることを期待されていると思

うだろう。

ラモンが、賊の襲撃をうけるという噂が流れたとき召使は逃げてしまった。主人を守ろうとする人はだれもない。忠誠心がないのである。ケイトは彼らには魂がないという。召使は、ラモン殺害の報酬めあてに家の窓をあけておいた。裏切りである。ケイトに言わせると、メキシコ人には自分の行為にたいする責任感がない。名誉心がなく、主人を裏切る。それにたいして、イギリス女性、ケイトの行為は英雄的である。

#### 9) ハレムの女、テレサ

ラモンはカルロッタが急死したあと、テレサと再婚する。これに対するケイトの反応が面白い。

今や、ケイトは、心底から、女性における「奴隷」的態度を軽蔑した。彼女が考えるところでは、テレサは自分を、ラモンの奴隷にしている。彼女は、奴隷や、妾(オダリスク)のように彼の前にひれ伏すのだ。彼女は、彼の性以外は何も欲しないのだ。一種の売春婦のようだ。(Q. 273)

ケイトには、まさに、ヨーロッパ人がオリエントの女性を見るよう目で テレサを見るのである。ケイトの考えは、とくに変わっているわけではない。サイドは、歌劇、『アイダ』を論じながら、ヴェルディーが登場させる女性たちは、当時のヨーロッパの、オリエントの女性にたいする固定観念であるとする。

彼(ヴェルディー)は何人かの神官を女性の神官に変え、オリエント女性をエキゾチックな行事の中心に据えるという、お決まりのヨーロッパ風のやり方に従う。女神官と同じ働きをするものは、19世紀中葉のヨーロッパ芸術にひんばんに登場する、舞姫、奴隷、妾、湯浴みするハレムの美人たちであった。<sup>(16)</sup>

ケイトのメキシコ女性の理解もそういうヨーロッパ風の理解であり、すでにのべたケイトのような勇敢で、自立する女性とは異なるのである。

#### 4

『羽毛の蛇』の初稿である『ケトサルコアトル』が最近刊行され、本論でも、これまで適宜、引用した。人名な

どを除くと、共通した点がかなり多い。ただ比較して見てすぐ気がつくことは、最終稿の『羽毛の蛇』では、古い宗教の復活運動にかなりの力点がおかれていることである。歌われるケトサルコアトルの賛美歌の数も『羽毛の蛇』の方がかなり多い。初稿では、シプリアーノはケイトに求婚するものの、ケイトはそれを受け入れない。ラモンや、シプリアーノが進めている宗教復活運動には懐疑的である。現人神など受け入れられない。結局、イギリスにいる母親と子供のところへもどることになる。ところが、『羽毛の蛇』では、最後に、ケイトはシプリアーノと正式に結婚するのである。したがって、その最初の意図は完成するのである。

ただ、そうすることによって、何が起るのか。メキシコの現実と離れていくのである。作者の意図は、ヨーロッパでは、形骸化し、事実上死んだ宗教をメキシコの土地で復活させようということであるが、その根底には、文明化されず、原始生活が多く残るメキシコというイメージが存在しているわけである。ヨーロッパ人には、その点で楽園のようであるかもしれないが、作品の随所から分かるように、実際は、メキシコ人にとっては貧困とそれによって生じる治安の悪さが最大の問題であり、それに目をつぶり、あたかも、宗教復活によってメキシコ人が幸福になるかのような錯覚を、この小説が与えることになりかねない。

エジプトは、ヨーロッパ人にとって過去の栄光に満ちたエジプトであり、現在のエジプトではないとサイドは指摘しているが、あまりにも宗教運動に傾斜していくことによって、現代のメキシコとは違うメキシコをこの作品が提示することになりかねない。

#### 5 結語

フォースターの『インドへの道』にヒースロップという裁判官が登場する。当時の植民地、インドを支配するためにイギリスから派遣された官吏であって、インド人の立場を絶対に認めることはない。インド人と交際することもない。インド人が使う言語を習得する気持ちはまったくない。これが、植民地行政官の一貫した態度であり、それをヒースロップはよく体現している。それに比べれば、ロレンスもケイトも旅行者であり、自由な見方をすることができる。この作品では、ふつうのヨーロッパ人にはない見方がある。しかし、結局は、サイド的に見れば、ケイトの見たものは、現代のメキシコで



はない。現代のメキシコは貧困と政治的混乱の渦中にある。メキシコ人が生きるためには、そこが一番重要である。その実態を書けば、メキシコ人も共感を持ったであろう。しかし、アステカの宗教の復活では、どの位の共感を呼び起こせるか。原始主義にもどることがどれほどの意味があるのか。ケイトの目には、メキシコではなくて、アステカが見えるのである。サイードがフランス人はエジプトに行きながら、昔のエジプトにしか関心をもたないと批判したことが、ある程度、ロレンスのメキシコ観にもあてはまる。

# 注

- (1) *The Letters*, Vol.V, 271.
- (2) *Ibid.*, 264.
- (3) *D.H.Lawrence: The Failure and Triumph of Art.* pp.66-7
- (4) *Ibid.*, p.65.
- (5) *Dark Night of the Body*, p.51
- (6) *D.H.Lawrence and the New World*, p.185)
- (7) *Orientalism*, p.1
- (8) *Culture and Imperialism*, p.10.
- (9) *Ibid.*, p.33.
- (10) *Ibid.*, p.34.
- (11) *Ibid.*, p.xviii.
- (12) *Heart of Darkness*, p.257.
- (13) *The Post-colonial Studies Reader*, p.58.
- (14) *The Plumed Serpent* (以下、P. と略する), p. 18. 本文よりの引用は以下、頁数のみ示す。
- (15) *Quetzalcoatl* をQ.と略する。
- (16) *Culture and Imperialism*, p.121

# 主要文献

Bill Ashcroft, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin (eds.): *The Post-colonial Studies Reader*. London: Routledge, 1995.

Elleke Boehmer: *Colonial and Postcolonial Literature*. Oxford University Press, 1995.

Michael Bell: *D.H.Lawrence: Language and Being*. Cambridge U.P., 1992.

David Cavitch: *D.H.Lawrence and the New World*. Oxford University Press, 1969.

L.D.Clark: *Dark Night of the Body: D.H.Law-*

*rence's "The Plumed Serpent"*. University of Texas Press, 1964.

----- *The Minoan Distance*. The University of Arizona Press, 1980.

Joseph Conrad: *Heart of Darkness*. W.W. Norton, 1988.

Stephen Greenblatt (ed.): *New World Encounters*. University of California Press, 1993.

Stephen Greenblatt and Giles Gunn (eds.): *Rethinking the Boundaries: The Transformation of English and American Literary Studies*. New York: Modern Language Association of America, 1992.

D.H.Lawrence: *The Plumed Serpent*. Cambridge University Press, 1987.

-----: *Quetzalcoatl*. Black Swan Books, 1995.

-----: *The Letters of D.H.Lawrence*, Vol.V. Cambridge University Press, 1989.

Edward W.Said

-----: *Orientalism*. Penguin Books, 1978.

-----: *The World, the Text and the Critic*. Harvard University Press, 1983.

-----: *Musical Elaborations*. London: Vintage, 1992.

-----: *Representations of the Intellectual*. New York: Vintage Books, 1994.

-----: *Culture and Imperialism*. New York: Vintage Books, 1994.

-----: *Peace and its Discontents: Essays on Palestine in the Middle East*. New York: Vintage Books, 1996.

-----: *Peace Process*. New York: Vintage Books, 1996.

Michael Sprinker(Ed.): *Edward Said: A Critical Reader*. Blackwell, 1992.

Douglas W.Veitch: *Lawrence, Greene and Lowry: the Fictional Landscape of Mexico*. Ontario: Wilfrid Laurier University Press, 1978.

Eliseo Vivas: *D.H.Lawrence: the Failure and Triumph of Art*. London: George Allen and Unwin, 1961.

川口喬一(編)『文学の文化研究』研究社出版, 1995年.

富山太佳夫（編）『ニューヒストリシズム』研究社出版、  
1995年。

-----

Summary

D.H.Lawrence and Post-colonial Criticism:  
With Special Reference to *The Plumed Serpent*

This is an attempt to throw light on *The Plumed Serpent* from the view of post-colonial criticism. Edward Said has been re-reading many of the English novels from his non-European viewpoint. This essay is an approach to re-read Lawrence's Mexican novel by applying Said's view to it.